

ヨーロッパの草地と酪農

はじめに

昨年の今頃といえば、この激動の時代にはやや古くなるかもしれないが、昭和48年8月から10月までの3か月にわたり、ヨーロッパからカナダ、アメリカまでの9か国を、北海道立試験研究機関からの海外派遣研究員として研究旅行し、そのうちの7か国で大学や研究所の研究者達と面談する機会に恵まれた。こうした研究機関を単身で研修訪問することは、事実なかなか大変なことで、一生懸命に話題を選び続け、帰国後の研修報告に備えてメモなどをとっていると、たくさん撮ろうと思っていた写真が、ついおろそかになったりする。また、研修のテーマが、「家畜を用いた研究手法による牧草および草地の高度活用法」といった訳で、研究所そのものの訪問が主となり、酪農家を訪問した例の方は、それほど多くなかったのだが、ここでは若干の写真を添えて、ヨーロッパ数か国における見聞を紹介したい。知るとおりの現状に加え、将来に向かってはさらにきびしい飼料の需給関係が予測される今、飼料の生産と損耗防止に、一段と努力を払うべきでありこれが酪農、肉畜生産の如何を問わず、その基礎をなすものであることを当研修旅行を通じて、改めて認識したのである。

スウェーデンにて

筆者の研修テーマが、ヨーロッパの酪農事情視察といったことではなくて、草と家畜を結びつける「研究手法」そのものといったような、かなり狭い範囲のものであったこともあり、スウェーデンでは南部地方のスワレフという村にあるスウェーデン種子協会の作物育種場と、ストックホルム郊外のウプサラ農科大学を訪ねたのみで、実際の酪農家を訪問した例はない。

しかし、スウェーデンにおける牧草あるいは酪

農に関する研究上の背景にも、他の国の場合とはかなり異なった特徴があたったように思う。すなわち、イギリスにおける草地研究の主流が、いわゆる放牧用草地に重きを置く典型的なものだったとすれば、スウェーデンでは牧草利用の形に、より耕種的感があったことである。つまり、刈り取り、貯蔵する場合の問題解決が研究テーマの中心をなしていたといえる。

まず用いられる草種であるが、南部の方は、デンマークと同じようにペレニアルライグラスが多く見られるが、中部から北方に行くにしたがってテモシー主体になる。オーチャードグラスは、アカクロバとの適当な混生比率を保つのが難しいというのが理由で、あまり用いられない。むしろ、代表的な草種組み合わせには、メドウフェスクが入って、テモシーとアカクロバが各3分の1ずつ混生するような場合であるという。ちっ素施用量は、10a当たり10kgぐらいで、あまり多くない。こうした草地での生産性であるが、一般的には、3回刈りで、10a当たり1番草3t、2番草2t、3番草1t半ぐらいが目標という。これに対して、放牧利用の場合、活用される草量は10a当たり4tぐらいが精一杯なので、採草利用が中心になるという。そして、放牧は、2番草以降の草が中心である。採草利用のうちの約8%程度が、いわゆるサイレージとして用いられ、残りの、大部分が乾草として利用される。この理由は、スウェーデンの立地条件によるもので、スカンジナビア山脈の西側になるノルウェーが、降水量が多いのに対して、この山脈の東側にあるスウェーデンは、降水量が少なく、その主要地帯では年間500mm~700mm程度という。こうした気象的な条件も、乾草主体の利用が重きをなす原因であろう。

したがって、研究場面でも乾草調製上の必要コストがきびしく論議される。オーチャードグラス